



第4回

麒麟か反逆者か「明智光秀」

講談師 一龍齋貞花

織田信長の花押は、麒麟の麒の字をかたどったデザイン。

麒麟は古代中国の想像上の生き物で、天下泰平の世の中にしか姿を見せないといわれます。

今から五五三年前の応仁元年、山名・細川の両氏が権力争いを始めた時から起こったのがいわゆる戦国時代。この戦国時代が長く続いたのを、なんとか平和にと考え、大きな理想の杭を打ち込んだのが信長。

「わしが、天下を泰平にして見せる」との誓いを込めて麒麟の花押。信長の強い決意が込められており、大河ドラマ「麒麟がくる」は、明智光秀のようなイメージだが、信長にほかなりません。

頼山陽の日本外史に、「神君家康公、天下を取るは大坂に在らずして関ヶ原にあり、関ヶ原に在

らずして小牧山に在り」

と書いています。しかし家康より前に天下取りにスタートし築いたのが、尾張の小牧山城。この小牧山城を麒麟の城と申します。

家康接待役の時、光秀が準備した魚が夏の暑さで腐り、いやな臭いが充満したため信長が怒って接待役を解任と、先号で書いたが、もっと過激な説が。

「徳川殿は大切な賓客なれど、余が旗下の大名じゃ。しかるに將軍家のお成りを待つと同様の支度。察するところ浜松殿は東海道一の大將と心を寄せ、後日に便なさん下心であらう」

「恐れながら念を入れてせよとの御意にござりましたゆえ、光秀が出来る限りのことを致しました。支度に過ぎたりのお叱りはご尤もながら、浜松殿

を頼らん下心などとは思ひもよらぬこと」

「黙れ、主人に対する今の一言聞き捨てならぬ。己れ如き奴、我が手を下すも汚らわしい。ソレ小姓共、面を打て」

烈しき下知に、ハッと応えて森蘭丸、鉄扇をもって走り寄り、「上意でござる」

光秀の額を丁々と打てば、信長、「エーイ、もっと打てッ」

額は破れて血は肩衣を染めました。が、光秀無念の涙にくれておりますのを、「まかり立て」

と、追い立てました。スゴスゴと退出する光秀を見送った蘭丸が、

「殿、光秀め必定謀反を起すでござりましょう。追いかけて討ち果しま

しょうか」

流石蘭丸先見の明がありました。が、「捨ておけ、何程のことをしようぞ。備中に出陣させ毛利と戦わせるがよい」

即日饗応役は御免となり、後任を惟住五郎左衛門に仰せつけ、光秀には早々兵を率いて中国へ赴き、秀吉の指揮の下に働くべしとの仰せが下りました。

これは講談太閤記の説。あくまでも光秀は反逆者という講談。これが世間へ反逆者と決定づけたのです。果たしてここまでのことをしたかどうか。更に中国出陣の命令書は、

池田恒興、細川忠興、筒井順慶、高山右近、中川瀬兵衛と一緒の廻状で、しかも光秀より小身新参の、細川、高山、中川より下に名を書かれているこ



とも心外。ことに信長幕下で一番先に城持ちとなったプライドもある。これは頭にききます。

取引先の肩書を間違え、宴会などで席順を間違えると大変。名前の読み上げ、葬儀の供花の名前の順序が間違っていることが往々にあり。念には念を入れ注意が肝心です。

天正十年五月二十六日、龜山へ入城

二十七日 愛宕山に戦勝祈願

二十八日 愛宕山西の坊で、里村紹巴らと連歌の会を催し、光秀が発句で

「時は今、天が下しる五月かな」と、詠みました。

明智の先祖は土岐。土岐は天下を取るといふ心をほのめかしたのではないかと、紹巴は光秀の胸中を察したが、気づかぬふりをした。

光秀が滅亡したのち、この連歌の詮議がやかましくなった時、紹巴は、歌の中の下しるのしの字を削って、またしと入れておき、

「これは何者かが中傷のため、しと改めたもので最初の句は、時は今天が下なるであります。ご覧下され、一度削って書き直した跡があるではござい

ませんか」

と言って罪を逃れたということですよ。

五月三十一日の夜、光秀は、明智左馬助、斎藤内蔵助、明智治左衛門、四方田但馬守、妻木主計頭ら、五人の腹心をひそかに呼んで、

「其の方ら、余に命をくれぬか。くれるならば相談あり。くれぬならば即座に我首を斬れ。どうじゃ」

主人の言葉に意中を察した左馬助が、

「我々は主従となりました時すでに命は殿に捧げております。今更お尋ねには及びません」

重ねて、春日局の父親、斎藤内蔵助利三が、

「この場に至りまして何の思案がござりましょう。信長公の仕打ち目に余るものがございます。殿に従って働くばかりでございます」

ここに衆議一決。

本能寺の信長に従う者わずか。最も恐るる羽柴秀吉は、宿敵毛利と戦っており一月二月に引返すことは出来ません。柴田勝家も越後の上杉の備え、荒木村重はすでに自滅。

丹後の細川藤孝、忠興父子、ことに娘玉は忠興に嫁いでいる。

大和の筒井順慶、摂津の池田恒興、高山右近、中川瀬兵衛らいずれも光秀の組下。味方してくれるに違いない。

敵は本能寺にあり

翌くれば天正十年六月一日、龜山城を出陣、

第一陣には、明智左馬助を大将として、四方田但馬守、村上和泉守、妻木主計頭以下四千余騎。

第二陣、甥の明智治左衛門光忠を将として、藤田伝五郎、並河掃部、伊勢与三郎、松田太郎左衛門以下四千。

光秀自ら本陣を率い、明智十郎左衛門、荒木山城守、斎藤内蔵助ら五千、総軍合して一万三千余騎。

老の坂を越え山城へと、ここを下れば沓掛。

右へ進めば京の町、信長が宿舎としていた本能寺へ続く。

沓掛で兵糧をとって腹こしらえ家来たちには、

「京都で、信長公の閲兵があるから、京へ向かうのだ」

と、布令。かくして総軍桂川を渡るや

光秀やにわに采配高く掲げ「敵は本能寺にあり、必死に攻めか

かれ。恩賞は望みに任すぞ」

大音に呼ばわれれば、先頭の明智左馬助秀満が、

「今日より、我が君が天下人じゃ。一同喜べ！」

ここに初めて京都へ向かった意味が分り、兵たちアツと思つたが、主人光秀に対する信長の冷たい仕打ちをかねてもれ聞き、憤りを覚えていた者も多くおりましたし、武士の習、たとえ事の善悪を問わず、主人の為に尽くすのが武士の自分。まして光秀恩顧の人々、意義唱える者無くひた押しに進み、二日の朝まだき本能寺を十重二十重に取り囲み、どつとばかりに関の声を上げたり。パパンパン

本能寺では、このようなことが起こつていようとは夢にも知らず、夜の更けるのを忘れて大酒宴。

信長が床に入つてようやく半刻。正に寝入りばな、どつと上がった関

の声に、信長ガバと起き上がるや、

「ハテ、心得ぬおびただしき音。蘭丸は居らぬか、物見せい」

いよいよこれより、本能寺戦いの場となるわけですが、この続き次回のお楽しみ。パパンパン